

京都春期特別集会 祈禱会

祈りたる事は既に得たりと信ぜよ

——マルコ伝第11章12～25節——

1976年5月2日

小池辰雄

果を結ばないような信仰 根から枯れた無花果の樹 神を信ぜよ 神の本願を受けとる その願いは成った 神さまの深いゆえ すでに得たりとせよ 反対の結果になっても キリストを思い浮かべて祈り入る 祈り

【マルコ11・12～25】

12 あくる日かれらベタニヤより出で来りし時、イエス飢え給う。13 遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。14 イエスその樹に對いて言いたもう『今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ』弟子たち之を聞けり。

15 彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを逐い出し、両替する者の台、鴿を売るものの腰掛を倒し、16 また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給わず。17 かつ教えて言い給う『わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし』と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盜の巢」となせり』18 祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

19 夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給う。

20 彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。21 ペテロ思い出して、イエスに言う『ラビ見給え、詛い給いし無花果の樹は枯れたり』22 イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。23 誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如くなるべし。24 この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。25 また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』

●果を結ばないような信仰

マルコ伝11章12節から、



¹² あくる日かれらベタニヤより出で来りし時、イエス飢え給う。
これは受難の二日目です。

¹³ 遙^{はるか}に葉^{いぢく}ある無花果^{みじく}の樹を見て、果^みをや得んと其^そのもとに到り給いしに、翌日、ベタニヤのマリヤのいる所ですね、そこから出て行かれた。「イエス飢え給う」というのですから、何かその前には召し上がらなかつたらしい。遙かに葉のある無花果を見て、果があるかなあと、そのもとにいらつしやつたところが、

葉のほかは何をも見出し給わず、是^{これ}は無花果の時ならぬに因^よる。

多分これは四月頃で、無花果の実るときではないと。そのまま、自然科学的な方面から、「時ならぬに因る」と書いてある。

¹⁴ イエスその樹^{むか}に対して言いたもう『今より後いつまでも、人なんじの果を食^{くら}わざれ』弟子たち之^{これ}を聞けり。

と。実にちよつと分らないような話です。エレミヤ記にもあるように、やはり神さまに本当に信仰を貫いていなかったイスラエルの民は果を結ばなかつたわけです。

「今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ」

というこのキリストの言葉はエレミヤの24章から引つ張つてきた言葉らしい。

「葉のほかは何をも見出し給わず」

と。果を結ばないような形式信仰、観念信仰、これはイエスの来られたときのユダヤ教の姿である。そのユダヤ教の姿をこの無花果の葉において例えられたわけです。それはまた現代のキリスト教においても当てはまる。本当の果を結ばないような観念、形式、また逸脱した他の形態もあるでしょうけれども、そういったような信仰の事態を象徴的に言われたわけです。

¹⁵ 彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売^{うり}買^{かい}する者どもを逐^おいだし、両替^いする者の台^{だい}、鴿^{はと}を売るものの腰掛^{こし}を倒し、¹⁶ また器物^{うつわ}を持ちて宮の内を過^ゆぐることを免^{ゆる}し給わず。

神殿は聖なる所、神に祈る所です。そこを商売の場になっている。両替をやっている。鴿を売っている。それでキリストはあまりの状況に、冒瀆の状況を見かねて、蹴倒してしまった。倒してしまった。まあ、ちよつと普通、キリストのようなかたがこういうことをなさるかと思うくらいな、そういう荒々しいことをなさつたわけです。

¹⁷ かつ教^{しる}えて言い給う『わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし』と録^{しる}されたるにあらずや、

「祈の家」という言葉はイザヤ書56章に出ている。神殿は即ち神さまとの会話の所、即ち祈りの家である。キリストはなにも神殿を否定したのではないので、預言者エレミヤは、

「お前たちは、『神殿、神殿、神殿』と言っているが、ダメだ」

と言いました。それは即ち、神殿にこだわって、そして本当に神殿を神殿らしくしてない



から、エレミヤはこう言ったわけです。「神殿、神殿、神殿」と言っているが、あるいは、「教会、教会、教会」と言っているがダメだというのと同じことです。

それで、形式的な教会に対して、内村鑑三先生は「無教会」ということを言いだしたけれども。しかし、無教会がいいのでも、また神殿が悪いのでもない。要するに、神殿に、本当に神殿を活かす事態がそこにあれば一向差し支えない。神殿がないことがまた一つのいいのではない。問題は、有るとか無いとかいうことでなくて、有る所であろうと無い所であろうと、

「そこに本ものが有るか」

ということだけが問題なんです。

マルチン・ルターの宗教改革のときにも、その乱暴の改革者が片っ端からぶち壊すようなことをした。そういうことはいかに、ルター自身も戒めています。いつも、改革者が出てくると、そいつをエピソードがすぐまた形式的にとつて、間違つたことをする。農民戦争でも、ルターの言つた動機は善かつたんだけど、そいつが別な行動に出られてしまったということがある。結果が逆に出てくる。

●根から枯れた無花果の樹

この場合も、神殿を神殿らしくしていればいいんですけれども、こんな商売の場にしてから、そこでキリストは怒ってひっくり返してしまつて、「祈の家だ」と言われた。

然るに汝らは之を「強盗の巣」となせり』

と。「強盗の巣」ということも、これもエレミヤ記7章に出てくる。

¹⁸祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを止さんと謀る、

キリストの反対の相手はいつも祭司長、学者、パリサイ人、サドカイ人です。「これはほんでもない乱暴者だ」と思つたんでしょう。

それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

群衆はその権威に実は参つたわけです。その権威に驚嘆したものですから、キリストを認めている。だから、この群衆がキリストを認めているから、うっかりキリストに手を出すと、群衆にまたやられるからという面があつたので、祭司やパリサイ人はうっかりキリストに手が出せなかつたという面もあるわけです。だけれども、何とかして亡ぼす機会を狙つていた。ついに、キリストの弟子のユダが彼らの味方して裏切つて、キリストを売るようなことになつたわけですが。

宮をひっくり返したことは、ヨハネ伝では始めの方に出ていますが、このマルコ伝ではむしろ終りの方に出ている。

¹⁹夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給う。

「夕になる毎に」ですから、この頃のしばらくの習慣として、都を出て、そしてベタニヤに



行つて泊まれた。ベタニヤは仮の宿で、キリストがいよいよ十字架にかかる前の、何とも言えない記念の町ですね。そして、しかも、その都を出てベタニヤに行かれたのは、一番の目的は何かという、祈り明かさんためだったんです。そういうわけで、

20 彼らの朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。

これは三日目のことです。前の14節で、

「今より後^{のち}いつまでも、人なんじの果を食^{くら}わざれ」

と一言いわれたら、無花果は根から枯れてしまった。大変なひとです、キリストというひとは。だから、

「わが言は靈なり、生命なり」

で、本当の権威を持っている。魔術ではないですよ、キリストの言は。神の御意がその時にいかなる示しを与えるか、ということになると、無花果は果が実らないのは時機的には無理なわけなんです。しかし、時機的には無理であっても、キリストとしては、今この無花果の樹をひとつの徴として、ユダヤ人の神殿を商売の場に行っているような事態に対して、無花果の樹を通して、

「果を实らせない無花果のごとく、お前たちの信仰はひとつも本当の果を实らせない、逆に毒の果を結んでいるようなものだ。そんなものは枯れてしまえ。神さまが審くぞ」

ということ、無花果の樹を通して示された。その神の御意が、神の怒が、神の審判が無花果を通して徴として表れた。だから、キリストには力がある。そこで、神の御意を受けとっていますから、無花果の樹が根っこから枯れてしまったというのは、

「お前たちはもう根っこから枯れるような事態だぞ」

と。だから、弟子たちはびっくりしてしまった。そういう、神の御意を本当に受けとって、そこに現象する言葉以上の言葉が、無花果が枯れてしまったという事実の徴として表していらつしやるわけです。

「表れては言葉となり、また表れては行為となる」

というのはこのことなんです。

●神を信ぜよ

21 ペテロ思い出して、イエスに言う『ラビ見給え、詛^{のろ}い給いし無花果の樹は

枯れたり』

どうも、ペテロあたりはまだ本当に受けとってはいませんよ、こんなことを言っているのは。ただ「枯れました」と言つて、何のことか分からないんだ、彼は。

22 イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。23 誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移

りて海に入れ」と言うとも、



「海」というのは死海のことを指しているんですが、

其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如くなるべし。

24この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。25また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』

この22節以下は祈りのことで非常に大事な一句です。神殿を瀆していることに対する審判として、無花果の樹が枯れた事実を言っている。普通なら考えられないようなことが直ちに起こってくるからね。

そこでキリストは、今私が説明したその事態はキリストは説明なさらないで、

「祈りがいかに本当であるならば、その内容が本ものであるならば、神さまに

聞かれるか」

と。それもキリストは、「何とかであるならば」というような今私が言ったような言い方をなさらない。すべて断言的に言われるです、キリストというかたは。

22イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。

と。この、「神を信ぜよ」というこの一句です。

「神さまを信ずる」

とはどういうことですか。神さまは何かを言おうとしていらつしやる。何かをなさうとしていらつしやる。そして、それは必ず成るんです。神さまの言は成る。『言は成る』と書く」と「誠」という字です。神さまの言は誠の言です。必ず成る言です。そして、神の意志は、

「天に御意に成るごとく、地にも成らせ給え」

とキリストが言っておられますが。天界では、神さまの天的現実においては成って行っている。神さまは自分に対しては本当に自信を持っている。神さまだけが自信が持てるんです。その神の自信、発してはそれを「神の本願」と私は言いますが。だから、

「神を信ぜよ」

ということとは、

「神の本願を受けとれ」

ということになる。神さまの本願を受けとれという。私たちの側の信仰の内容、祈りの内容というものは、果たして神の御意に合っているかどうか分かりますよね。だけれども、私たちのこの祈りが、自分をぶちまけた祈り、とにかく己を偽ってない祈り、これが大事なんです。

●神の本願を受けとる

祈る内容と自分というものの本質がピタリ一つであるところ。そういう投げかけの祈り。自分を投げかけるといふことと内容が一つであるようなズレのない祈り。



「私はどうしてもこうありたい。こうしたい。こうなりたいんです」

「あの人の病気を何とかして治してください」

とか、いろいろあるわけだ。

しかし、それに対して神さまはどのように本願を持っていraftしやるかは分からない。

けれども、神さまは、自分の願いを本当に聞いてくださっているということ。

「本当に聞いてくださっている」

とはどういうことかというところ、願い以上のものなんです。神さまが聞いていらつしやることは、私たちの願い以上の内容です。もし、私たちの願いと同じ内容だったら、神さまは大した神さまではないよ。絶対の神さまは、私たちの願い以上の世界を持っていraftする神さまです。

だから、願ったことが、結果がどうなるかということとは問題にするな。結果はどうかは問題にしないで、とにかく、神さまは願いを本当の一番深い意味において聞いてくださっているという、そのことを信ずる。その一番深い意味において聞いてくださっているその内容は神の本願の側にあるんです。だいたい、くだいようなことを私は言いましたけれども、そういう角度です。端的に言えば、

「神の本願を受けとれ」

ということになる。

●その願いは成った

²³ 誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、

キリストも非常に懇ろにこここのところは強く言っている。

「こんな内容が一体あるですか？」

と言いたいですね。「この山」というのはオリーブの山ですよ。このオリーブの山が死海に入れというわけです。

「オリーブの山が死海に入れと言うとも、その言うところが必ず成ると信じて

心に疑わないならば」

と。この「疑う」という字は「デアクリノマイ」という字で、心の分裂を言うんです。心が分裂していないならばと。ドイツ語の「ツヴァイフェルン」(疑う)という字がこの「デアクリノマイ」というギリシア語の直訳みたいな字です。「ツヴァイフェルン」というのは、分裂する、二つに割れる、小さな二つとなる」という字です。

「心が二分しないならば、そのごとく成るよ」

という。

「そうすると、それではひとつ私は」



なんて言つて、とんでもないことを祈るかもしれませんが、このキリストの言葉を文字通りに受けとつて。そして、「必ず成る」と大いに一生懸命で思い込んでね。ところが、それは成らない。それはどういうことですか。

キリストがこういう極限的な譬えを仰つたですね、「オリーブの山が死海に入れ」と。

「必ずと成ると信ずる」

ということはどうして可能ですか。「必ず成ると信ずる」ということのためには、「必ず成る」ということを、一体、成らしめるものは誰ですか。神さまではないですか。私たちが成らせるのではない。この願いの内容は、私たちの力の範囲ではない。私たちの力の範囲ではない神さまの力を、神の絶対の力を信じて、そして、

「それが成る」

と心の分裂がないならば、「そのように成る」と。

魔力の世界もそういうことがあるんですよ。悪霊の魔術的な魔力の世界にも、信仰が非常に力強く、

「必ず成る」

とやつてれば、魔力も働く。霊の世界は、悪霊の世界も力を持っている。それから、神の世界ももちろん力がある。

今度は、このキリストの言葉が非常に私たちに躓きになる。これを文字通り見ていると、

「信仰で、自分たちの主観の信仰の、信念の強さによって必ず成る」

というようなことに響く。そうすると、このキリストの言葉は非常に躓きになる。

ということは、神さまを本当に信じて、

「神さまの御意が成る、本願が成る」

ということを本当に受けとつていくときには、自分の願いも全托してしまうわけです。自分の願いも全托してしまうということは、自分の願いに対して自分の側の力というものは全然ない。全然向こうに返している。それだから、神さまの力が本当にそこで働くという、本願があるならば必ずなる。

けれども、本願がないときには、成らないですよ。成らないけれども、そこにすぐ現象はしないけれども、祈っていることのこちらの偽りなき祈りであるとするなら——全然逆のことが表れてくるかもしれない——全然逆のことが表れてきても、本当に神を信ずるというなら、神の本願を然りとして、自分の願いをただぶちまけただけで、願いの結果というものを問題にしないときには、そこに生ずるものが自分と全然反対のことであつても、

「その願いは成つた」

ということを受けとる。これがもう究極の信の世界だと私は思っています。



●神さまの深いゆえ

結果がどうなるうとも、たとえば、どうしてもあの病氣は治してあげたい。ところが、とうとう死んでしまった。けれども、

「その願いを神さまは本当に聞いてくださった」

んだと。これが天界へ逝ってしまったということは、願いが聞かれずしてなお奥で本当に聞かれたということになる。私たちの願いを聞いて――神さまの本願はもつと

「深いゆえ」

を持つていますから――その「深いゆえ」のゆえに、私たちの願いの反対のことが起きても、

「アーメン ハレルヤ!」

ということが言える。神さまは、私の表面は聞いてくださらなかったけれども、

「あなたは本当に聞いてくださった、あなたは最善をなしたもうた」
ということが、自分の絶信、信の世界です。

そのときに、もうすでに私たちが本当に祈ることは全部聞かれている。一番深い意味において聞かれている。

「結果がプラスに出ようがマイナスに出ようが、どう出ようが、神さまは最善をなしてくださった」

ということ。そしてそれは、あるときは本当に願いの通りになることがあるでしょう。いろいろですよ。どっちにしても、本当に感謝して御名を讃えていくというのがこの信仰の世界です。

そして、真剣に投じたときには、神さまの方ではかなり無理なことも生じてくるということもあるわけです。神さまの方で、

「お前の願いをひとつ聞いてやろう」

ということも、これはルカ伝18章のところにも出ていますが、しつこく祈ったらとうとう聞かれたという。しかしながら、

「とうとう私は聞かれなかった。私の祈り方がまだ足りなかった」

と、そういう判断をすぐ結果からすることはない。

どうぞ、そういうことで、どのような結果がなくても、

「祈ったことは自分の祈り以上の意味あいにおいて、深さにおいて、成った」

ということを受けとる。それでももって私たちの祈りは本当に強められていく。結果を見ては、

「どうも、これではダメだ。神さまを信ずるわけにいかない」

とか、

「自分の祈りはどうだ」

とか、どうのこうのと、そういう祈りのこちら側の強弱というものを量ってみたり、神さまの御意をこつちから付度そんたくしてみたり、そういうことでは本当の信の世界でない。



●すでに得たりとせよ

そういうことでもって、キリストのこの言葉は、躓きの言葉のもうひとつ奥をつかまなくてはいかん。これは文字通りには掴めないですよ。キリストの言っていることは随分ひどいんだから。

「オリーブ山が死海に移れ」

なんて言ったって、これはちよつと困るよ。それほど極端なことまでもキリストは言つて、

「お前たちは、本当に祈れ。私は相当無理なことも聞いてやるぞ」

くらいのことがあるわけです、この中に。だけれども、逆のこともなさる。しかし、その逆なことにおいて、

「実は自分の願い以上のことがそこで聞かれた」

と。そして、長い歴史のあとで、

「やはりあれが最善だった」

ということになってくるわけです。

²⁴この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。

と、凄い言葉ですよ。もう未来完了を現在完了にしてしまえというわけです。これは、決して「ある場合には」と言わないんです、キリストは。

「凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、

と。キリストの世界というのは本当に断言的な単純な世界でね、

然らば得べし」

と。それから、

²⁵また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、

これは本当に大事なことです。人との間において怨みを持っていたならば、人との関係において自分が本当に人を赦していなければ、神さまの赦しの世界に、神さまの御意を聞かせていただく世界には入らない。だから、相手がどうであつても、これを本当に赦し担つていなくてはいかん。相手は傲慢で、なかなか言うことをきかないやつもあるですよ、それは。けれども、もうひとつ奥の世界で赦し担っている。そういう者は神さまの方でまた本当に担つてくださるし、またこちらでも赦してくださる。

あの主の祈りの中にもそうです。

「赦したるごとく赦してくれと祈れ」

と書いてありますね。そこがやはり自分を捨てた立場。だから、願いにおいても自分の悲願に絶した世界。悲願に絶すると本願が成ってくる。

「必ずすべて祈ることは成りたり」

と。こちらの祈りを悲願と言うならば、



「すべて悲願に対しては本願が成つていくぞ」

と。その悲願と即した本願となるか、反対の本願となるかは知りませんよ。けれども、必ず成る。

「既に得たりとせよ」

ということは、もうひとつ奥を言えば、そういうことです。

●反対の結果になっても

K君の奥さんのお母さんはもう癌の末期で――この人は信仰はないんですけれども――もう死ぬという。私は祈りながらK君に葉書をかいた。私は葉書を書くときには必ず祈つて書くんです。

「祈ります」

と言って、祈らないと偽りになりますから。葉書を投函するのを忘れて、今ここに持っているから、皆さんに、証言みたいになる。

「母君のご病床を思い断腸の感です。何故であるか、なぜそんなご病気になったか。このような病気にどうしておなりになったか。人生不可解、嗚呼無情。言葉になりません。ただお祈りの中で、お母様の魂に天来の力と光と愛がお母様の意識の奥に臨んでいることを信じ入るだけです。一切を突き抜けて十字架を突破して復活し給うた主に在つて勝利してください」

と書いた。Iさんも大変なとろに今いらつしやる。けれども、Iさんの信仰は、私はかつてお会いしても素晴らしいかたで、癌を癌とも、相手にしてないかたですよ。自分の癌を人ごとみたいなことを言っておられる。実に明るい顔をしている。それがついに痛い痛みの中に今入つていらつしやるけれども、それでも完全にそこで勝つていらつしやる。だから、キリストのものの凄い力が彼の魂を勝利に導いていらつしやる。しかし、肉体がどうなるかは分かん。けれども、

「できるならば本当に、神さま、あのIさんを助けてください」

と私たちは祈らざるをえない。けれども、肉体が助けられなくても、本当の霊体の勝利がそこにあつて天界に行かれる。しかし、そのことは今、予想することはいらんです。本当に治していただきたいなら、それだけを祈つていればいい。それだけを祈つて、それは結果は反対のことになつても、

「アーメン、万歳、ハレルヤ!」

です。これが私たちが本当に聞かれているということですよ。「もし、万一」なんていうのは祈りにならないですよ。

「本当に助けてくれ!」

という祈りはもう「助けてくれ」でいいんです、全身ぶちまけて。そして、それが反対の



結果になっても、

「神さまは本当に聞いてくれた」

というのが私たちの信仰です。

ですから、私心のない自分をぶちまけた祈りなら、本当にそれでいいんです。それを今度は神さまはどういうように本願で受けとり給うかは、向こう側の話。結果は神さまの御意がなっていくだけです。

そして今度は、聞かれて

「ありがとう」

と言って、聞かれたことだけを感謝して、そして、

「信仰は、祈りというものはありがたいものだ」

と、そこでお終いになったらダメなんです。聞かれたら、聞いた内容以上に神をいよいよ受けとっていかなくては。聞かれようが、聞かれなかつても、受けとるものは神さまだと。感謝するのは、神さまという存在、キリストという存在、これに感謝していく。

「キリストの栄光が、御意が成っていくことだけがうれしいんだ」

というところに人生の究極の目的がある。そうすると、私たちは、知らないまにキリストの栄光体になっているんです、こつちが。キリストの証し、またキリストの栄光体とされている。そういうことです。

こういうことは普通の人、世の中の人の判断には分からない。だから、祈りということは何んと楽しいことか。勝利している。必ず勝利している。どのみち、勝利している。

「聞かれざる祈り」

なんて、内村先生が書いているけれども、私はあれをあるところまでは感心して読んでいたんだが、「どっこい」ということにあるところであってしまった。というのは、「聞かれざる祈り」は、一番本当のところ――内村先生もある角度からそれを言ってるしやいますけれども――「聞かれざる祈り」はないんです。全部、こちらがあるがままにぶちまけていくことは全部、一番深い意味において聞かれていく。そしてむしろ、反対のことが起きたときに、いよいよ平伏して進んでいくだけです。また、願いがそのまま聞かれても、またいよいよ平伏していくだけです。

そういうことでもって、もうどつちみち神さまの御意がなっていく。自由自在な、神の側にずっと自分の気持が移ってきますと、祈りが本当に楽しくて楽で力強くなってくる。こういうことで、もう全存在が結局、祈りを通してキリストを受けとっていくということになるんです。

●キリストを思い浮かべて祈り入る

今日は静かな深い祈りをします。ある時は、沈黙の祈禱会でもいいんですよ。黙って祈つ



ている。黙って祈っているうちに、霊動が起きる。あるいは、突然叫びだすかもしれない。そういうのを今晚やつたつていいですけども。始めしばらく黙って祈ります。

そのときに、皆さんいいですか、福音書のキリストをよく思い浮かべてくださいよ。どこでもいいですから。自分の何か具体的な祈りがあつたら、キリストは死人を甦らせたり、嵐の湖の上を渡って行ったり、らい病人を清めてしまったり、目の見えない人の目を開けてしまったり。いろいろな場がある。どれでもいいから。サマリヤの女となって井戸端のキリストでもいいし。

だから、私はドラマだと言っている。そのドラマの現実の中に自分を入れて、このキリストを瞑想して祈る。究極のところは十字架になりますけれども。十字架のキリストを瞑想する。このキリストが叫ばれると、聖所の幕が切つて落とされたなんてもの凄い。復活のキリストは、地震が起きて、岩盤がぶつ倒されてしまった。どういうキリストでもいいですから。あるいは、復活のキリストが魚を食べた。

そういうキリストでもいいですから、それを瞑想しながら、

「主さまー」

と言つて、主の御言、御光、また聖霊、これの中に入っていく。正直、使徒行伝のペテロ、パウロは獄にいても、鎖が切れてしまったり、大変な現実ですね。そういうイエス・キリストを。御霊のキリストでもいい。もちろん、究極的に言えば、

「主は即ち御霊なり」

とパウロが言っているとおりですから。そういうのを瞑想しながら、祈りの世界に入っていくんです。

いいですか。二千年前のキリストは、今も現実に私たちの現実に向つてくださる。そして、キリストに圧倒されて、その中に入っていく。…(異言)…

そういうことになります。そうすると、そこから、もし、日本の教育界のことでも、あるいは何のことでも、具体的な祈りをもつて、あるいは、友だちの病のことでもグーッとね。具体的にどうぞ、誰でもお祈りになつても結構ですが、もうしばらく、じつとそういうような現実にして、それから祈りたくなつたら祈ってください。そうしたら、人が祈ったら、その祈りを同じく受けとつて、聞きながらその祈りを助ける。聞きながら、人の祈りを助ける。そうすると、一人の祈りがグーッと全体の祈りに化していく。心の合った人たちの祈りというものは強いんです。

キリストが、心の合わない人は祈りの世界から出した。そして、大事な祈りのときは、本当に心の合ったひと二人と共にキリストは祈られた。疑っている人がいると、祈りの妨げになる。キリストはよくそのことを心得ておられた。

祈りたいことはたくさんある。霊の世界ほど現実のことはない。霊の世界は絶対にばかにならない。主さまは最高のまた最も力強い、もつとも憐れみの深い霊ですから。そして、



祈りの質はこのキリストの愛です。これが祈りの質。愛は最高の力ですから。

●祈り

主さま、あのIさんは素晴らしい魂です。私も一遍か二遍お目にかかりましたが、身に癌を受けながら、癌を何とも思わず、ただ主の御栄えのため、主にあつて証し人となっていることをうれしくして来ていらつしやいました。そして、今、癌の末期となり、憎むべき癌の病菌が蔓延してきて、お苦しみと承っています。しかし、その苦しみの中にあつても、Iさんはニコニコしてこれに打ち勝ち、そして

「ああ、主の愛はなんと」

と言つて、喜んでいらつしやると承りましたが、実に驚くべき信仰の勝利、あなたのご愛の勝利です。主さま、あなたのご愛が本当に打ち勝つて、倒れんとするIさんを、どうか神さま、御意ならば、これを治してやつて立ち上がらしめてくださる様に願ひ奉ります。どうぞ、主さま、本当にあなたのご本願に私たちは沿つてお願いしたく存じておりますが。どうぞ、何はともあれ、Iさんが本当に今日、今晚も、また明日も勝つてください。あなたが本当に彼にあつてその痛みを乗り越えて勝利してくださる様に切に願ひ奉ります。

またK君の奥さんのお母さんも毎日深刻な痛みで、もはや麻酔もきかないような事態と聞いておりますが、どうぞ、これもまた深刻な癌の病、彼女の魂の奥に、その意識の奥にあなたが本当に力を与え、愛をもつて深く顧みて、そして主さま、本当に意識のほとんどのないところの事態に、なおあなたのご愛がその魂をつつみ、そして、地上の生涯がもし終わるのでしたら、天界に、神さま、本当に新しく生まれさせて、K君たちの祈りの事態を聞いてやつてくださる様に切に願ひ奉ります。K君たちがこのことを通していよいよキリストに信ずることのいかに重大なことであるかを新しく受けとり、勝つてくれるようにお願いいたします。

今日はまた、朝よりただ今に至るまで、このつたなき僕をとおし、あなたが詩篇19篇、詩篇63篇をとおし、主さま、光のキリストさま、この愛の光のキリストさま、あなたが朝にも昼にも夜にも私たちの見えざる本当の光として貫いてくださるがゆえに、私たちもまた夜にも輝く聖霊の灯火となって聖霊の燈台となるような、そういった魂としていよいよ私たちに光が内住し、いかなる人生の嵐が来ても、絶対に消えないところの聖霊の光、私たちのほらわたの底に本当に不滅の燈火として灯つてください。

神さま、かくして本当にまた、詩篇63篇のごとくに聖霊の水、渴きをしないところのこの水をいよいよ飲み、そして、聖霊は即ち、詩篇19篇では火となり、詩篇63篇では水となつて、神さま、私たちに示してくださいました。どうぞ、そのように御霊の水として私たちの潤いとなり、また御霊の火として私たちの光となり愛となり、自在に働いてくださるうちに願ひ奉ります。



ここにある兄弟姉妹たち、みなそれぞれ本当にキリスト自身が恵みとなってくださったことを感謝いたします。また、なお集会に出ようとして帰った姉妹もありますが、どうぞ、かの姉妹を顧みてやってください。また、本当によく耐えてきました。しかし、やがて結婚しますが、どうぞ、そのところにおいて本当に今までの耐え忍びが本当にあなたが祝福してくださるように切に願ひ奉ります。

一切はあなたの勝利を信じ、キリストにあることのいかに、パウロがローマ書8章の終りで絶叫したことくに、

「**天上天下いかなるものも、我らをこのキリストの愛から離れしむる何ものがあるか**」

とパウロが絶叫しましたが、本当にそうです。私たちは主イエス・キリストにかくも愛され、圧倒され、力強けられて何をか言わん。必ず互いに相助け、互いに相祈り、相助けて行きます。

どうぞ、この兄弟姉妹たちと共にやがて天界において凱歌をあげ、そして、本当に黙示録7章に書いてあるとおり、天の幕屋において、この神の幕屋において、私たちは本当に、もはや別れるところを知らざるところの永遠の世界を大いなる希望として、この地上をいかなる艱難も突破して進んで行きます。

「**艱難があればあるほど天上の欲びは大である**」

とパウロが言いましたが、そのとおり。何をか懼れん。いよいよ、神さま、本当に主イエス・キリストが我らにおいて自在に力強く働き給わんことを切に願ひ奉る。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

主さま、うれしいです。ここにある兄弟姉妹たちみんなそれぞれの天賦をいただき、ここに天的な使命をいただいて、それぞれのつぴきならない路を歩ませられ、そしてこれが大調和をなします。神さま、本当にこの自由とこの調和を何をもつて例えんや。この地上の花もまたこれに及ばずと思われませんが、どうぞ、私たちがするように天界の花となり、また天界の樹に例えられるような素晴らしい楽園を、私たち自身が楽園を展開して参ります。そのような本当の楽園が、人々を本当に休ませ、また力づけるそのパラダイスがこのエクレシアです。どうぞ、我々のエクレシアとはそのようなパラダイスであることができますように切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讃美、ここにある兄弟姉妹たちの溢れるところの感謝と讃美と共に、御名により捧げ奉る。アーメン

